

安来高校植物図鑑（2020年9月）

和名：イヌホオズキ（犬酸漿）

植物の名前の最初に「イヌ」がつくと、「役に立たない」という意味になります。このイヌホオズキは、ホオズキに似ているけれども役に立たないという残念な名前です。ナス科の植物であり、星形の白い花はナスの花に似ているように感じます。かわいらしい丸い実がつき、熟すと黒くなるのですが、この実には毒があります。一見食べられそうな雰囲気ですが、決して食べないようにしてください。右の写真では、まだ若い実が下にぶらさがっています。



和名：コニシキソウ（小錦草）

ニシキソウより小さいのでこの名前があります。漢字を見ると、元大関を思い出してしまいますね。日当たりのよい場所でよく見かけます。地をはって広がっており、卵形の葉の中央に暗紫色の斑紋があるのが特徴で、花よりも葉のほうが有名なのではないでしょうか。淡い茶色の茎を切ると白い乳液が出てくるので、子どもの頃に切って遊んだ覚えがあります。アリが花粉を運ぶので花びらがなく、花の存在はほとんどわかりません。葉の付け根あたりに膨らんで見えるのが果実で、白い毛が密生しています。



果実に白い毛



和名：オオニシキソウ（大錦草）

ニシキソウより大きいです。コニシキソウとオオニシキソウは安来高校にありましたが、ニシキソウは見かけませんでした。在来種であるニシキソウが追いやられているのでしょうか。コニシキソウは地をはっていますが、オオニシキソウは茎が立ち上がり高さ20~30cmはあります。こちらも花が小さく、ほとんど目立ちません。膨らんで見えるのは果実で、白い毛はありません。白い花びらのように見えるのは腺体(蜜を出す部分)の付属体だそうです。いわゆる普通の花のイメージで見てしまうと理解できない構造をしています。



和名：イヌタデ（犬蓼）

また名前の最初に「イヌ」がついています。ヤナギタデという植物に比べると葉に辛みがなくて薬味として使えない、役に立たない、という意味だそうです。ちなみにヤナギタデは「タデ食う虫も好き好き」ということわざで知られており、葉に独特の辛みがあります。イヌタデの小さい赤い花を赤飯に見立ててままごとで遊んだことから、アカマンマというニックネームもあります。タデ科タデ属は近縁種が多く、見分けが付きにくいですが、安来高校で見られたのはイヌタデだと思っておりますが、もしも間違っていたら申し訳ありません。



和名: ヤハズソウ (矢筈草)

葉の先を引っ張ると矢筈(ヤハズ)のような形になってちぎれることからこの名前があります。矢筈とは、矢の末端で弓の弦を受ける部分のこと、もしくは掛け軸をかける道具のことです。葉が右図のようにちぎれる、ということを表しているのでしょうか。個人的に、カラスノエンドウ(俗に言うピーピー豆のこと)の花に似ているな、と思い調べたところ、両方ともマメ科植物でした。



和名: ヒメムカシヨモギ (姫昔蓬)

ムカシヨモギという草に似ていてかわいい花をつけるので、「ヒメ」という言葉がついたようです。明治維新の頃に日本に入り、鉄道線路に沿って広がったことから、御維新草、明治草、鉄道草などの別名があります。種子が小さく綿毛があるので、汽車が線路を走る時に風に舞って広がったとか。今の時期、町中どこでもこの草を見かけますが、これと見た目がそっくりな草で、オオアレチノギクというのがあります。右写真のような外観ならば大抵どちらかなのですが、見分けるには先端についている小さい花を見てください。舌状花という花が咲きますが、ヒメムカシヨモギは花が開くのに対し、オオアレチノギクはほとんど花が開きません。慣れない人を見ると蕾のように見えると思います。右下の写真のように花が開いていたら、ヒメムカシヨモギと判断してよさそうです。



和名: キツネノマゴ (狐の孫)

名前の由来ははっきりしていません。花の姿がキツネの顔に似ているからとか、花が咲き終わった後の花穂がキツネの尾のように見えるからとか、諸説あります。私は後者のように思いました。平安時代の薬草の書物に記載されているようで、古くから日本で知られていることがわかります。キツネノマゴ科の植物は本来熱帯に多く、日本のような温帯に生えているのは少数派だそうです。沖縄にはキツネノヒマゴ(狐の曾孫)という名前の近縁種があります。



8月はあまりにも暑く、屋外での写真撮影を諦めていましたが、9月になると一気に涼しくなりました。草むらを歩いていると、様々な動物が現れます。バッタは私を避けるように飛んで逃げていきます。先日、足元にアマガエルが出てきてくれました。同じ日にはヘビも出現しました。模様は確認できませんでしたのでヘビの種類はわかりませんが、結構長かったです。皆さんも校舎の周囲を歩くときは十分に注意してくださいね。

